

## 高機能自閉症児を担当する5年目の保育士における子どもへの関わりと支援

Interaction between a nursery in the fifth year and a high functioning autism child, and his support

○幼児保育学科 寺島 明子  
Akiko TERASHIMA鎌倉女子大学 大野 和男  
Kazuo OHNO保育士 青柳 静花  
Shizuka AOYAGI保育士 横山 いずみ  
Izumi YOKOYAMA

## 要旨

寺島・大野(2007)らは、新人保育士が何年経てば一人前の保育士になっていくのかという課題をもち、研究に入り5年目を迎えた。Y保育士は、今回研究対象のA・K児が3歳児の時に加配保育士として担任をしていた経緯がある。A・K児は、3歳児で保育園に入園する前から高機能自閉症の診断がされていたが、Y保育士は、自閉症の特徴が現われていても気にせず、保育を行っていることが明確にされた。

Y保育士は保育士5年目を迎え、保育園の行事や活動を熟知しており、A・K児にゆとりを持ってかわり成長発達させたことが推察できた。また、Y保育士がA・K児に抱いていたことは、A・K児のことを障害児と自覚しつつも、「一人の人間として尊重しながら肯定的に言葉掛けをして丁寧に関わってきた」という思いや願いや方法がA・K児に伝わり、その結果Y保育士と子どもたちの信頼関係が構築でき、既存クラスの友達と集団遊びができた。自分の困ったことをY保育士に言葉で自分の思いを伝えることができたと思われる。しかし、Y保育士はA・K児が高機能自閉症であり、そのすべての特徴を消滅させ健常児と同じような情緒をもつことはできないと感じていたことも理解できた。

【キーワード】 加配保育士 高機能自閉症 子どもの成長発達 関わりと支援

## 1. 問題：保育士が専門職になっていくということ

本校の教員2人と卒業生2人とで研究会をスタートさせ、2011年の3月で4年目が終了した。卒業生は保育士5年目が終了した。この5年の間に卒業生は保育士として悩み苦しみながら、あるいは子ども達の赤裸々な姿に、疲れた思いは癒されながら保育士という専門職としての階段を一步一步登ってきつつある。

本研究会は、保育養成課程で学び資格を取得し、卒業した学生がどのように子どもたちと関わりながら、保育士としての専門職者になっていくのか、月一回の研究会では面接方と紙面質問形式で記述してもらいながら行ってきた。この研究会の意味は、卒業生の保育に対する悩みを聞きながら、悩みを解決する課題の持ち方、つまり、カンファレンス的な意味も含んでいた。

カンファレンスの必要性は、小田(2010)は保育者の資質向上について、保育者は今まで自分自身で意識していなかった事柄を知り、またこれまでの考え方に変化を及ぼす「気づき」が必要である。そして、「気づき」を得るために研究者相互の作用のあるカンファレンスが有効であると感ぜられると述べている。1) この意味において卒業生と教員との研究会は、その一端を担ってきたのではないかと思わ

れる。

また、Y保育士は5年目の保育士であるが、専門職として学びつつあり専門職者としての力の全ては身につけてきているのであろうか。まして本年度は、5歳児クラスで高機能自閉症児の加配保育士である。

そこでY保育士のような加配保育士は、A・K児を担当していく時にどのように見取り、どのようにクラスとの関係を構築し、また、保護者との関係もどのように行っていけばいいのか不安であったと推察される。いざ入園式が終了し4月にA・K児を目の前にした時に、行動を明確にイメージすることはできなかったと思われる。そのことを新人の担任保育士について佐々木(2010)は、子どもの中であらゆる行動の感触をイメージできないままに子ども達と関わりと言っている。2) そのため、A・K児の姿が一過性のものなのか、連続性なものなのか理解できず悩みが拡大してしまい、イライラ感が募り精神的なストレスになってしまう場合もあると考えられる。Y保育士が保育士として専門職者になっていくということは、子どもの姿を捉えた時に、もし問題行動が起きていたとしても、この姿は子どもの育ちの中ではよく起きることであり、問題にすることではないと直感的に判断することができることでも

ある。そして、専門職者としての保育士は、子どもに対して自分自身で自分の関わりをコントロールしながら関わることができることでもある。また、佐々木(2010)は、子どもの姿を捉えて支援をしていく時には、新人保育士にとって「逡巡」することを支えられる機会が、子どもとのかかわりの感触を実践知として蓄えるための機会となっていると述べている。3) このことは研究会などをしてY保育士の相談に乗り、保育をどのようにすればよいのかY保育士の思いに寄り添いながら行っている当研究会は、保育士が専門職者となっていくことの一つの方法でもあると言えるであろう。

以上のように保育士が専門職とし育っていくのには、研究会などの機会が重要であると考えられる。また、保育の専門職者が子ども達の保育をしていくのは、どのようなことを考えながら行って行くのであろうか。

最初に子ども達が育つ環境には、人的・物的・社会・自然の四つある。人的環境とは、子ども達の周りにいる「人間」であり、保育所の保育士・乳幼児・保護者・栄養士・調理員など保育所に係る「人間」のことをいう。物的環境とは、子ども達の周りにある全ての「もの」であり、保育所にある園舎・プール・机・椅子などの施設的な「もの」から、教材・遊具・玩具など子どもが自ら関わる全ての「もの」をいう。自然環境は、人間が全く手を付けてないもの(山・川・木・森など)をいう。社会環境は、人間が生活するために必要な社会構造など人間が作り出した状態をいう。乳幼児が育つための環境設定として環境の以上四つは大切である。この四つの中で自然環境は、人間が手を付けることができないものであるが、他の三つは人的環境である人間が主体となり、子ども達に提供できるものである。保育所の子ども達に影響を及ぼす人的環境は、保育士と乳幼児であると言える。その中で特に保育士の影響は、乳幼児に絶大な影響を与える。子ども達は、誕生してすぐから家庭と言う環境の中で大切にされながら育ってくる。そして、家族以外の人に出会う保育所の保育士との出会いは、乳幼児は刺激的で保育士の全てのものを受け入れてしまう純粋な心を持っている。この純粋な心をもっている子ども達は、この保育士の姿を見てそのすべてを受け入れて育って行くのである。その意味において保育士は、子ども達のよい意味でのモデルにならなければならない。

また、保育士は保育士の責務として2008年に告示された保育所保育指針を基軸に拠り所としながら保育を進めていくことが不可欠である。まず保育士は乳幼児の特性から「環境を通して学んでいく」1) ことを考慮しつつ、乳幼児自らが育とうとする環境

を、乳幼児の「近自然的環境」に位置づけていることが望ましいのである。つまり、保育士は、乳幼児が環境を通して自然に育つように環境設定する必要があると考えている。4)

寺島(2008)らは、新人保育士に影響を与えていることとして先輩保育士の存在を挙げていた。先輩保育士が新人保育士に対して、新人保育士が頑張っていることを認めつつ、こうすればもっとうまく行くという肯定的な言い方で支援していくことで成長していくことも明らかにした。つまり、保育士2年目の保育士は、先輩保育士との人間関係を構築しつつ保育を行っているといえるだろう。5)

また、寺島(2010)では、「A保育士(研究対象)は、保育の中心としては、ベテラン保育士の考案した保育内容を受け入れ実践した。その保育方法は保育活動がうまく行ったとか言葉掛けがうまく行ったではなく、A保育士(研究対象)が心に抱いている「子どもたちのことを大切にしている」2) という思いが子どもたちに伝わり、その結果A保育士(研究対象)と子どもたちの信頼関係が構築でき、クラス全員で集団遊びができたり、保育所を休んだ子どもたちのことを心配する思いやりの言葉が聞かれるようなクラス集団に成ってきたと思われた。

しかし、保育現場では新人保育士のことを考えて人間関係を構築してくれる職場はほとんどないと言っているだろう。新人保育士が先輩保育士に対して自分から人間関係を構築しようとしにくい限りできないものであろう。またY保育士の保育は、子どもたちのことを大切にしているという思いが子どもたちに伝わり、その結果Y保育士と子どもたちの信頼関係が構築でき、クラスの皆で遊ぶことができるようになるのであろうか。

新保育所保育指針では、2. 保育所の役割(4) 保育士の専門性には、「保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである」3) と保育士の専門性に言及している。具体的には、保育士の専門性としては、「①子どもの発達に関する専門知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術、②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術、③保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育環境を構成していく技術、④子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくために知識・技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適

宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、⑥保護者等への相談・助言に関する知識・技術などが考えられる」<sup>4)</sup>と記載されている。

以上の事柄が、新人保育士に課せられたとしてもそう簡単に達成できるものではない。では、新人保育士が保育をしていくためには、クラス全体の子ども達をどのように見取り、その見取りからどのような見取りかかぬらひを持ち、子ども達に具体的にどのような保育活動を媒介に支援していくことで、子ども達を成長発達させることができるのだろうか。新人保育士が専門的な保育士になって行くのには、保育園で子ども達や保育集団や保護者との三者の人的環境から育てられるのである。また新人保育士は日々の保育の中で必要な物的環境である保育園の書類からも育てられるのである。

保育に必要な記録は、「(1) 保育管理上の記録

①児童票、発達記録、健康診記録、身体計測記録、出席簿、給食関係記録簿、事務処理日誌、家庭調査台帳 ②安全保育と危機管理に関する計画と記録 ③避難訓練に関する記録 (2) 保育実践上の記録 ①日々の保育日誌、延長保育日誌、保育実践記録、行事計画と記録、デイリープログラム、②保育計画と評価(教育課程)、指導計画と評価(年間、月間、週案、日案)、指導案 ③ケース記録 (3) 家庭・地域社会との連携に関する記録、情報関係 ①日々の連絡帳、園だより、クラスだより、保健だより、給食だより」<sup>5)</sup>などがある。保育士はこれらの保育に必要な記録を書くことで、子ども達の様子や、保育士自身の行った保育を客観的に評価することができる。この書くという行為は、特に連絡帳を書いて保護者に子どもの毎日の様子を知らせることは新人の保育士でも10年目以上の保育士でも差がなくできる、と石塚(2008)は述べている。また、連絡帳に書いて伝えるという支援は、保育士にとって子どもの毎日の状況や連絡事項などが項目で決められているため、連続性、安定性があり、抵抗なく安心して書くことのできるものであるとも述べている。<sup>6)</sup>

以上のように新人保育士が専門職者のなっていくには、養成校を卒業しただけでは育たないのである。新人保育士にとって養成校は、保育士になるための最低条件であって最高条件ではない。新人保育士は子ども達を目の前にした時に、自分の現在もっている感覚や力を使い一人で決断して行くしか方法はない。保育士として子どもの願いに寄り添いながら保育を行うことは難しいのである。逆に新人保育士は園長先生や主任保育士や他の保育士から、寄り添ってもらいたいのである。このようにしてもらうことで、新人保育士は育って行くのである。また、新人保育士は、保育所で保育を行う数々の書

類を書くことで、保育の意識が明確になっていくことを、新保育所保育指針ではその必要性を記載し告示しているのである。更に多くの現場の園長先生から、「最近の卒業生は一人前になるのに5年かかる」と言われている。それには、養成校を卒業した学生に現場での実態を把握させ実践していくのには、研究会を開催し、新人保育士が具体的に実践できるように子ども達の細かい見取りから始まり、保育を創りあげていく想像性をも育てることが必要であることを感じている。あまりにも、自分で考えなくても生きてきてしまった現在の学生達の環境の悪循環がスパイラル化している現状のように思っている。つまり、社会そのものが保育士を育てて行くのには、あまりにも衰退してしまった環境のように思われてならない。

## 2. 研究の目的

上記で、保育士が専門職となっていく子どもとの関わりや支援に関することについて考えてきた。そこで、本研究では、保育士5年目のY保育士に視点を絞り、果たしてどのような過程を経てA・K児と健常児の統合保育でクラスの子ども達と関わり、どのように支援し成長発達させていくのであろうか。Y保育士が保育をしていく過程を検討していく。また、どのような過程で保育の専門職者に成長していくのかを記述することで、保育士における保育のあり方を明確にしようと試みる。

## 3. 研究の方法

高機能自閉症A・K児を担当する加配保育士1名から情報を得た。高機能自閉症A・K児は、5歳男児であった。家族構成は、父・母・兄・本人である。Y加配保育士は、M短期大学を卒業して、5年目の保育士である。研究期間は、平成22年4月から23年3月までである。基本的には、月1回1週目の水曜日に面接を行った。面接は12回行った。面接はおよそ午後6時から8時までにかけて約2時間行われた。①これまでの様子、②気になること、③よくする遊び、④関わりが多いお友達、⑤遊びの中での役割、⑥来月に向けての保育士の願いの6点について尋ねた。

本研究の対象者は、A保育園に就職して1年目は複数担任保育士で2歳児を1年担当し、2年目は自閉症4歳児のA・K男児を加配保育士として1年間担当した。3年目にB保育園に移動し、高機能自閉症児3歳男児を1対1で担当し、4年目はクラス担任保育士で3歳児を1年担当し、5年目は高機能自閉症児5歳男児(2010年と同児)を1対1で担当したものである。

#### 4. 結果及び考察

##### (1) これまでの様子

Y保育士のコメントのうち、「これまでの様子」を整理したのがTable. 1である。

Y保育士から書いてもらったコメントを①「自閉症児と自覚してA児に関わったこと」、②「健常児と障害児の統合保育の相乗効果をねらった支援方法について」、③「A・K児の自閉症の特徴について」、④「A・K児が楽しんだことについて」、⑤「A・K児を見取ったことについて」、の5項目について述べられていた。

①「自閉症児と自覚してA・K児に関わったこと」については、4回支援していた。4月では話し合いの時には言葉で話すよりも、ホワイトボードを用いて知らせる方法を取っていた。6月には言葉で褒められることを言われるとA・K児は怒ってしまうので、親指を立ててグーのサインをすると理解でき、A児からも同じように返して来る事ができた。7月には製作ののり付けの支援で、のりを付ける紙の四つ角に数字を書いて迷路のように数字をたどったらゲーム感覚で楽しくできた。9月には、雑巾がけができないため、キャラクターのピカチュウが好きなので、廊下に付けてあげると掛けられるようになった。

以上のようにY保育士の言葉による支援ではなく、A・K児が目で見分けるように視覚的に支援することで無理なく行動ができていたことが伺えた。

②「健常児と障害児の統合保育の相乗効果をねらった支援方法について」4月には大好きなT・A児の近くにいることが多かった。また5月にもT・A児・I・M児との関わりが多く、女兒の名前入りの絵を描くこともあった。

6月には新しい遊びでのルールを理解したがすぐには遊ばず友達の姿を見ていた。その後自分のグループが勝つと喜んで自分のグループの所へ行って喜び合いゲームに参加できた。そして給食に出た苦手なトマトを友達と一緒に食べることができ、自信がもてるようにもなった。更に9月には苦手なトマトを友達に応援されながら3つ食べた。

7月には友達に「○○ごっこしよう」と声を掛けて遊ぶようになる。また、昼食後早く食べ終わるとH・M児と二人になることが多く「スライダーのホースを持って」とA・K児がH・M児に頼む姿が見られた。更に友達にさりげなく優しい言葉を掛ける姿が見られる。8月には6月で褒められたグーサインをY保育士に決めてもらったA・K児は、「H・M児にもグーサインをやって」と言ったり、昼寝の布団を隣に敷いて寝られるようになった。その後9

月には友達に布団を敷いてもらっても怒らなくなったり、食事が遅くなった普段関わりの少ない友達にも「頑張れー」と声を掛けていた。

10月にはクラスにある遠足の地図を見て家でも地図を描いて保育園に持って来て、遠足に期待を持って行くことができた。11月にはグループでの話し合いで、自分の思いを先に話してしまうので聞けるようにして行きたい、とY保育は願いを持っていた。12月には苦手な友達ともクリスマス会の司会を一緒にやり抵抗なくできた。

1月には自分ができたことを全保育士に見せたり、ハイタッチをしたりし、喜びを共感でき、友達からも「凄いね」と言われた。大縄跳びで皆がやり出して3日目に入りやったり、ドミノの遊びでも皆の所を見ていつの間にか入りやり出す姿もあった。3月には進学に期待を持って過ごしており、手洗いや歯磨きを怠った時にY保育士が、「かっこいい一年生は色々なことがよくできるんだね」と言うので急いでやり出した。そして堂動と卒業式ができた。以上のようにA・K児と他児との統合保育形態ではメリット面がその全体を占めていたことが確認できた。

③「A・K児の自閉症の特徴について」7回支援していた。4月には、ルールが複雑になったり、否定されるとパニックになったり、昼寝の布団を友達に持たれることが嫌いで自分で敷いていた。5月にはY保育士がA・K児に活動を伝える時に怒ってしまうこともあった。また、言葉では褒められているのにその意味が分からず怒ってしまうこともあった。6月には周りの音や扇風機を気にしてしまい集中力が続かなかった。7月にはいつも同じ友達の側にいるので、Y保育士が他の友達というように伝えると「困ったな」と言っていた。その後友達に誘われたが行かず、保育補助員のおじいちゃん先生とペアになった。12月にはハンモックがお気に入りになり安心する場となっている。9・10・11・1・2・3月には自閉症の特徴は捉えられていなかった。以上のように見て来るとY保育士は自閉症の症状も把握しながら保育に当たっていることが分かる。

④「A・K児が楽しんだことについて」は4回支援していた。4、5月にはお年寄りとの交流を楽しんだ。6月には泥で抵抗なく遊んでいる。プールでは水に顔を付けられ楽しんでいる。8月には運動会のダンスの練習を楽しんでいるであった。

これらは、保育の行事活動であると思われるが、Y保育士はそれらを日々の保育の中に意図的に入れながらA児に支援していた。そのことに対してA児は楽しく参加して遊んだことが伺えた。

⑤「A・K児を見取ったことについて」は4月で

は、朝の会や帰りの会などで話が聞けるが長時間同じ姿勢のお山座りはできない。しかし運動遊びが好きで、その時にY保育士が言葉で指示するとA児が受け入れることを把握している。トマトが苦手だが好きなおかずのおかわりがあると食べることや、朝の準備や片付け、お昼寝の用意などスムーズにできることも理解している。午睡は一定時間眠れるなど保育での基本的な生活習慣は身につけていると確認している。また、手先の力が弱いことも見取っている。5月には簡単なルールのある遊びはするが、ルールが変わったりするとやらないこともあると見取っている。しかし、文字に興味を持って書いている。6月には音に合わせて歩くことはできるがジャンプはジャンプをした下に決められた位置に降りることができずずれてしまう。7月には製作でのり使いは上手いが、ハサミで丸く切れることは難しい。同年齢の友達とはペアには成れないがおじいちゃん先生とスムーズにペアになることができた。A・K児が毎朝今日の活動をY保育士に聞いてくるので話してやると一日期待をもてたり、安心して過ごさせていた。8月には保育士に注意されてもパニックにならないほど成長したことを見取っている。また怪我をしたことを保育士に伝えることができたり、更に9月には運動会の競技の竹馬やダンスを上手にできた。

10月にはハロウィンパーティを楽しみにし、Y保育士と一緒にA・K児の描いた図案で衣装を作るがハサミが上手く使えなかった。11月には自由遊びの時にサッカーをしていたり、運動遊びでは片足のつま先上げのバランスは取れるようになってきたり、ブランコに喜んで乗っている姿を目撃している。またパートの先生と午後お兄ちゃん役になりごっこ遊びを楽しんでいるがケンパはできない。12月にクリスマスの劇を大きな声で台詞を言うことができた。1月にはかるた、すごろく遊びを楽しみ、サッカーを自由遊びの時にするようになった。6月にできなかったジャンプも自分からジャンプの練習もしている。2月にはコマまわしを参観日にやり、自信を持ってできた。また歌を楽しく歌ったり、紙鉄砲を音が出るように保育士と作った。更に卒園式の練習を2月からやり当日は皆と一緒に堂々とできた。

このように全体の月ごとのクラスの様子を見ると、Y保育士はA・K児の3歳児の時にも加配保育士で担当していたため、A・K児の支援方法を迷うことなく、園の行事や活動を取り入れながらゆとりを持って行い、成長発達させていたことが分かった。支援方法としてA・K児の好きな遊びをさせながら、健常児の集団遊びにも意図的に関わらせ、両者の関わりを巧みに入れた統合保育の良さを取り入

れながら行っていることが推察できた。

また、Y保育士は自閉症児の特徴である耳で聞いて行動することよりも、目から入って行動できることが分かっていたことも理解しており、それらを巧みに使っていたことが伺えた。

更にY保育士は保育士5年目になり自閉症児の特徴やA・K児の状態に合わせてながら支援していた。以上のように見て来るとY保育士はA・K児のあらゆる面から丁寧に関わり見取っていることが分かった。

Table 1. これまでの様子

4月	5月	6月	7月	8月	9月
朝の会や帰りの会などお山座りで座って話が聞けることが多い。	世代間交流で来園するお年寄りとの交流を楽しむ。	褒められることをグーのサインに決められると、A・K児からも同じようにやり出した。	製作でのり使いは上手いが、ハサミで線の上の丸を切ることが難しい。	運動会のダンスの練習を楽しんでいる。	苦手なトマトを友達への援助で3つ食べることができた。
大好きな友だちがいて主にT・A児と座って話を聞くことが多い。	散歩に出かける時、年長児が車道側を歩くことを伝える際、自分で気づいて手を繋ぎ替えることができる。	新しい遊びでルールを理解したが、すぐには遊ばず友達の姿を見ていた。その後自分のグループが勝つと喜んで自分のグループの所に行って喜び合いゲームに参加できた。	のりづけの支援で紙の四つ角に数字を書いて迷路のように数字をたどったのりづけができ、ゲーム感覚で楽しくできた。	A・K児からH・M児への関わりが見られ、「Mちゃんにも、グーのポーズをやって」と言ったり昼寝の布団を隣で寝たいと言った。	雑巾がけができないためピカチュウのマークが好きなので廊下マークをつけて雑巾がけができるようになった。
大きくなったお祝いので、司会をしたり、飛行機の飛ばし方の見本をやってくれた。	簡単なルールある遊びは楽しめるが、ルールが変わったりしないこともある。	並み歩きは、音に合わせて歩くことが少しずつ出来てきているが、ジャンプはできていない。	毎朝、今日の活動を聞いてくる。聞くことでやるべきことが分かって、期待を持って安心して過ごせた。	片付けなど時間を知りづいて保育士に知らせたり、何時まで遊べるかを保育士に聞いてくるようになった。	布団を敷く時の拘りがなくなって、順番に敷くことが出来たり、友だちに敷いてもらっても怒らなくなった。
朝の準備や片づけ、お昼の用意などスムーズにできる。	T・A児・I・M児との関わりが多く、ま前の女の子の名前入りの絵を描くこともある。	給食に出た苦手なトマトを友達と一緒に食べ、自信がもてるようになった。	夏の遊びでもスライダーの「ホースを持って」とA児がI・M児に頼む姿が見られた。	製作など、余り好きでないことでも途中で止めたりせずに最後までやり切れる。	食事が遅くなった時に普段関わりの少ない友達にも「頑張れー」と声を掛けていた。
ルールが複雑になったり、否定をされるとパニックになってしまう。	Y保育士の指示に対して褒められていると取れない。	プールは水に顔を付けられ楽しんでる。	友だちに「○○ごっこしよう」と友だちに声を掛けて遊ぶようになる。	保育士に注意されなくてもパニックにならなくなった。	運動会の競技の中に竹馬を上手にできた。
保育士と一緒に遊ぶが少しずつ友だちになんてきた。	A・K児に活動をY保育士が伝えることもある。	周りの音や扇風機を気にしてしまい集中が続かない。	保育補助員のおじいちゃん先生とベアに成って触れ合い遊びをした。	怪我をしたことを保育士に伝えることができた。	運動会のダンスを運動会当日自分でできた。
話し合いなどは、ホワイトボードを用いて知らせると伝わりやすい。	文字に興味を持って書いている。	泥に抵抗なく遊んでいる。	友だちにさりげなく優しい言葉を掛ける姿が見られる。		
トマトを食べられないが、好きなおかわりがあると食べる。			いつも同じ友だちの側にいるので、Y保育士が他の友達といるように伝えようと「困ったなー」と言っていた。		
昼寝の布団を友だちに持たれることが嫌で自分で敷く。					
運動遊びが好きであり、来この時には指示が入りやすい。					
長時間姿勢を保つことが難しい。					
お年寄りとの交流を楽しんだ。					
午睡は一定時間眠れる。					
手先の力が弱い。					

10月	11月	12月	1月	2月	3月
遊びのルールが分からないので、遊びながらルールを知らせていく。	少しの時間だが、自由遊びの時間にサッカーをする姿が見られた。	クリスマス会の劇発表で大きな声で台詞が言え楽しくできた。	ドミノの遊びでも皆ののころを見ていつの間にか入りやり出した。	Y保育士と遊びながら次に友達と遊べるように支援していく。	卒園式の練習を2月から行い卒園式は上手にできた。
クラスにある遠足の地図を見て家でも地図を描いて保育園に持って来て、遠足に期待を持って行くことができた。	運動遊びでは、片足のつま先上げでのバランスが取れるようになってきた。ケンパはリズムに合わせてできない。	苦手であった友だちともクリスマス会の司会を一緒にやり、抵抗がなくなってきた。	自分でできたことを全保育士に見せたり。ハイタッチをしたり、喜びを共感でき、友達からも「凄いね」と言われた。	個別支援保育から口周りの筋肉が弱いとの話があり、にらめっこやドミノをろうそくに見立てて吹く遊びを取り入れた。	堂々と卒園式ができた。式の後の謝恩会では式の頑張りからか、テンションが高く成ってしまう様子が見られた。
ハロウィンパーティを楽しみにし、Y保育士と一緒にA・K児の描いた図案で衣装を作るが、ハサミが上手く使えない。	言葉の接続詞の使い方や、手遊びで指先まできちんと伸ばすこと、どた歩きにならないことを日々の保育でやっていくようにする。	ハンモックが気に入りで安心する場と成っている。	かるた、すごろくなど、お正月遊びを楽しんでいる。コマが上手く回せないため、練習をして上手になった。また、コマ遊びを毎日練習をして上手になって欲しい。	参観日でコマが上手にでき発表ができた。歌が好きなので楽しくえるようにしたい。	進学に期待をもって過ごしており、手洗いや歯磨きを怠った時にY保育士が、「カッコいい一年生は色々なことが、よくできるんだよね。」と言うと急いでやり出した。
	パートの先生と午後におにいちゃに成り外で遊びをしてごっこ遊びを楽しんでいる。		自由遊びの時間サッカーなど集団遊びに参加する機会が多くなってきた。	Y保育士と一対一で遊んだり、友だちを入れたりして関わりが広がるようにして行きたい。	
	グループでの話し合いで、自分の思いを先に話してしまうので、友達の話を聞けるようにしていきたい。		丸型のスポンジマットを使ってジャンプの練習をしている。	紙鉄砲で音が出るようにY保育士と一緒に作った。	
	ブランコには喜んで乗っている。		大縄跳びで皆がやり出して3日目に入りやり出した。	雪遊びを思い切りできた。	

(2) 気になること

Y保育士のコメントのうち、「気になること」を整理したのがTable. 2である。

①「基本的生活習慣について」、②「友達との関わりにおいて」、③「自分勝手な行動とその支援方法について」の3項目から述べられていた。

①「基本的生活習慣について」、4月には靴のかかとを踏んでしまう。8月にはシャツをズボンの中に上手く入れられないと気にしているがそれ以降には気にしていない。

②「友達との関わりにおいて」、4月には本を読んでもらう時に座っている人の間に入ってしまうこともあった。5月には自分が大好きな友だちに対してしつこいほど関わろうとするので相手がいやがっている姿がある。6月にはその半面憧れというような気持ちからかI・M児の姿の真似をすることがあり、二人一緒にふざけてしまうのでY保育士に叱られる。更に特定の友達の傍らにいたことが多くあり、その友達がいなくなるとどうなるのか気にかけていた。8月には、必要以上に好きな友だちに関わろうとすることが気に成っている。9月には、自

分のいる位置から遠い所にいる好きな友達に話し掛けてしまうことがある。また競争にこだわることもある。「〇〇くんには勝つぞ。トマトを食べた方が勝ち、など」。12月にはクリスマス会の時、会食の席をくじ引きで決めたが、「〇〇くんと一緒にならなくてよかった」と悪気はない感じでさらっと言ってしまったことがあった。Y保育士が、「自分がT・Aくんと言われたらどんな気持ち？」と聞くと、「やな気持ち」とA・K児は言った。「〇〇くんもやな気持ちだよ」と伝えると謝りに行った。そして泣きながら謝りに行ったので、泣くことまでしなくてもいいのと思った。もしかしたら自分が言った言葉の意味が分かっていないのかと感じた。その時にY保育士は今後も気をつけて見て行きたいと自分の関わりを客観的に見ていた。また、12月にはT・A君のことを好き過ぎてトラブルがあった。原因はT・A君が自分にスリッパを貸してくれなかったという内容であった。相手の気持ちが分からずに、泣きながら自分の気持ちを強く伝えようとしていた。T・A君が困っていることを伝えると、「ごめんね」と言うが、好きな友だちということもあり、引きずつ

てしまったのか、一日を通してちょっとしたことでもぐずりっぽかった。2月には物事の理解面で、一日入園の練習で「女の子が先生役をやるからA・K児は小さいお友達役ね」と言ったら、「ぼく小さい子になっちゃうの」と言って〇〇役と言うことが理解できなかった。

③「自分勝手な行動とその支援方法について」、4月にはY保育士が指示を出した時に、気持ちが合わないと手が出たり怒ることがあった。5月には保育士に対して攻撃的な姿も見られる。また都合の悪いことになると話題を変えようとする。田植えの活動で田植えをやろうとするが泥が嫌いでやらない。6月には相手の気持ちが分かり難いという障害の特性もあり、「先生嫌い」と言うなど相手が言われて悲しい言葉を使ってしまうことがあるので、相手が言われて嫌いだと思うことを本児が体験して感じられるように知らせていくとY保育士は捉えている。7月にはS児は感情を素直に表現できることから、全身で表現してしまうので、表現の仕方や気持ちの表し方を知らせていくことにしていた。また歩く時にドタバタ歩きになってしまうので膝を曲げてジャンプができるように練習するようにした。

10月には保育士を遊びに誘って遊びたがる姿がある。クラスの友達は体を動かす遊びのサッカーや縄跳びを楽しんでいるが、本児はこれらとは別の遊びを楽しんでいる。散歩の時に、猫や犬など動物を怖がる。11月にはA・K児に対して、こうした方がいいと思うことをY保育士が言い過ぎると、A・K児の思いと反しているからか、注意されたことが嫌なのか、怒ることが度々見られる。また、昼寝がなくなり、午後の時間に入ってくれる休憩パートの先生にべったりし、一対一で遊ぶことが毎日である。11月には友達に対して意思の疎通が上手く行かないのか怒り口調で話すことがある。そこでY保育士が仲立ちすると「そういうことか」と納得することが多い。12月にはフルーツバスケットで鬼をやりたいので、鬼ばかりやらないことを伝えると、鬼にはならなくなった。しかしこの時にA児はY保育士に注意されているのに怒られたと思い、不機嫌な様子であった。また、ハサミが上手く使えないことを「月ごとの様子」の項目でも4月から捉えていたが12月には「気になる」項目でも取りあげている。また指先が不器用であるとも見取っている。1月コマ回しで紐が上手く巻けない。ジャンプのバランスが悪くそのためケンパができ難い、と捉えていてA・K児の体の使い方の不器用さをあげていた。2月には好きな友だちの傍にいたがることから、友だちが嫌がってしまうような仕草があるので、嫌なことは本児にきちんと伝えるように周りに言っているが、

中々言えていないのが現状である。

クリスマス会と参観日にやった劇はどちらも勇者をやりたいがり、そこでA児のやりたいことをさせたが違うものを作ってあげれば他者理解の面において広がっていくのでよかったのではないかと感じていた。クラス担任の保育士の話していることが分かりA・K児だけに言っている訳ではないが、自分一人に言われていると思い気にしている。自分にとって必要な情報だけを取り入れて生活することが難しいのは、自閉症特有の症状である。座っている時間が長いと集中力が切れてしまい、手いたずらが多くなるので集中できる時間を伸ばして行きたいとY保育士は気にしている。

3月には毎週やる全体お帰りの時に、クイズを出したが毎回出しているので「毎回はだめ」と言われると怒り出した。クイズも、自分で考えるので意味が通り難いものになってしまうため、全体で発表する前に保育士にどんな問題を出すのか話してから、クイズの問題が解きやすくなるように言葉を足すようにした。その結果A・K児は、小さい友だちでも分かるように簡単な問題を考えるようになってきた。しかし、卒園の時期になって友だちの近くにはいるが、一人遊びが多いように思う。また、人によって態度や振る舞いが違うことが気になる。このように自閉症特有の症状が気になることも見取っている。

このように全体の月ごとのクラスの様子を見てくると、Y保育士の気にしていることは他のクラスの友達の姿を見取りながら「皆と違う行動をする」という評価をしつつ、A・K児の自閉症の特徴も考慮しながら支援方法として否定的な言葉の表現を避け、クラス集団の力を利用しながら上手く支援していることが伺えた。



Table 2. 気になること

4月	5月	6月	7月	8月	9月
本を読む時座っている人の間に入って行ってしまふことがある。	特定の友だちに対してしつこいほど関わろうとするので相手が嫌がっているような姿も感じられる。	「先生嫌い」など相手が言われて悲しい言葉を使ってしまうことがあるので、相手が言われて嫌だと思ふことをA児が体感して感じられるように知らせて行く。	感情を素直に表現できることから、全身で表現してしまう。表現の仕方や気持ちの表し方を知らせていく。	シャツをズボンの中に入れて入れられない。	競争に拘ることがある。「〇〇くんには勝つぞ。トマトを先食べた方が勝ち、など」。
指示を出した時、気持ちと合わない手が出たり、怒ることがある。	田植えをやろうとせず嫌がっている。泥が苦手。	I・M児に憧れ真似をすることがあり、一緒にふざけてしまふY保育士に怒られる。	歩く時にどたばた歩きになってしまうので膝を曲げてジャンプができるように練習する。	必要以上に好きな友だちに関わろうとする。	自分のいる位置から遠い所にいる好きな友達に話し掛けてしまふことがある。
靴のかかとを踏んでしまう。	都合の悪いことになると話題を変えようとする。	特定の友だちの傍にいたがるが多くあり、その友だちがい無くなるとうなるのか気に成った。			
	保育士に対して攻撃的な姿も見られる。				
10月	11月	12月	1月	2月	3月
逃走中という鬼ごっこを友だちと楽しむが、いつもハンター役の鬼役をやってしまふ逃げ役をしない。「バリヤー」と言って勝手に自分のルールを創り遊んでいる。ゲームのルールで逃げ切れたら賞金が貰えるようにする。	友だちに対して意思疎通が上手くいかないのか怒り口調で話することがある。Y保育士が仲立ちすると「そう言うことか」と納得することが多い。	T・A児のことが好き過ぎてトラブルがあった。原因はT・A君が自分スリッパを貸してくれなかったという内容だ。相手の気持ちが分からずに、泣きながら自分の気持ちを強く伝えようとしていた。T・A児が困っていることを伝え、と、「ごめんね」と言うが、好きな友だちということもあり、引きずってしまったのか、一日を通してちょっぴり通じたことできずじまっていた。	コマ回しで紐が上手く巻けない。紐を束ねてしまうことができない。	好きな友だちの傍にいたがることから、友だちが嫌がってしまうような仕草がある。嫌なことは本児にきちんと伝えるように周りに言っているが、中々言えていないのが現状である。	毎週やる全体お帰りの時に、クイズを出したが、毎回出している。毎回はだめだと言うと怒り出した。クイズも、自分で考えるので意味が通じ難いものになってしまうため、全体で発表する前にY保育士にどんな問題を出すのか話して、クイズの問題が解きやすくなるように言葉を足すようにした。小さい友だちでも分かるように簡単な問題を考えるようになってきたように思う。
クラスの友だちは体を動かす遊びのサッカーや縄跳びを楽しんでいるが、本児はこれらとは別の遊びを楽しんでいる。	A・K児に対して、こうした方がいいと思うことをY保育士が言い過ぎると、A・K児の思いと反しているからか、注意されたことが嫌なのか、怒ることが度々見られる。	フルーツバスケットで鬼をやりたいが、鬼ばかりやらないことを伝え、鬼にはならなくなったが、言われたことを怒られたかと思ふので叱られたのか分かっていなかった。	ジャンプのバランスが悪い。そのためケンパが難しい。	物事の理解面で、一日入園の練習で「女の子が先生役をやるからA児は小さいお友達役ね」と言ったから、「ぼく小さい子になっちゃうの」と言って〇〇役と言うことが通じなかった。	友だちの近くにはいるが、一人遊びが多いように思う。人によって態度や振る舞いが違うことが気になる。

嫌な活動をする時に、「え～まだやるの～夜まで？」と言うので見通しの持てる声掛けをした。	昼寝がなくなり、午後の時間に入ってくる休憩パートの先生にべったりし、一対一で遊ぶことが毎日である。	クリスマス会の時、会食の席をくじ引きで決めたが、「〇〇くんと一緒にならなくてよかった」と悪気はない感じがさらっと言ってしまったことがあった。Y保育士が、「自分がT・Aくんと言われたらどんな気持ち？」と聞くと、「やな気持ち」とA・K児は言った。「〇〇くんもやな気持ちだよ」と伝えると謝りに行った。泣きながら謝りに行ったので、自分が言った言葉の意味が分かっていないのかと感じる。今後も気をつけて見て行きたい。		クリスマス会と参観日にやった劇はどちらも勇者をやりたがり、やったがA児の友達関係を広げるためには、違う役をやっておけばよかったと感じた。	
最近は見られなかったが、Y保育士を遊びに誘って遊びたがる。		ハサミが上手く使えない。指先が不器用である。		A・K児だけに言っている訳ではないが自分一人に言われていることを気にしてとても嫌がる。	
自分勝手にルールを考えるのではなく、皆で話し合っって新しくルールを考えるようにしたい。				座ってる時間が長いと集中が切れてしまい、手いたずらが多くなるので集中できる時間を伸ばして行きたい。	
散歩の時に、猫や犬など動物を怖がる。					

### (3) よくする子どもの遊び

Y保育士のコメントのうち、「よくする遊び」を整理したのがTable. 3である。

4月の遊びは「絵本を読む・レゴブロック・ホワイトボード・絵を描く」であった。そのうち絵本を読むは6・7・11月で絵本は好きであることが伺えた。またレゴブロックも5・12・2・3月と遊んでいた。ブロックは6・7月の2カ月行っていた。ホワイトボードは4月だけで他の月には出てきていない。絵を描くのは5・6月にも行っている。

ごっこ遊びは大好きで6月に「家族ごっこ」で、8月に「学校ごっこ」で、9月に「寿司やさんごっこ」で、10月に「世界探検ごっこ・逃走中（おにごっこ）」で、11月に「ごっこ遊び」を行い5カ月間やっていた。自閉症児は創造する力は無いと言うがこのことも該当しないように思われる。11月には「ドミノ・コマ」で、2月には「ドミノ」遊びを友達と一緒にした。9月には「粘土」を、11月には「友達に折ってもらった折り紙」で、3月には「クイズを作って」皆と同じように遊んでいた。

このように、A・K児の1年間のよくする遊びを見てくると、Y保育士はA・K児の好きな遊びを中心に据えながら保育方法の一つである遊びながらA・K児が育ってほしいことを願い、絵本や玩具を設定していることが推測された。また友達との関わりで「ごっこ遊び」を意図的に提供しながら成長発達させていることも伺えた。

Table 3. よくする遊び

4月	5月	6月	7月	8月	9月
絵本を読む	絵を描く	本を読む	本を読む	学校ごっこ	寿司やさんごっこ
レゴブロック	レゴブロック	ブロック	ブロック		粘土
ホワイトボード		家族ごっこ			
絵を描く		絵を描く			
10月	11月	12月	1月	2月	3月
世界探検ごっこ	ごっこあそび	レゴブロック	ドミノ	レゴブロック	レゴブロック
逃走中 (おにごっこ)	友だちに折ってもらった折り紙		こま	ドミノ	クイズを創る
	本を読む			文字の積み木	

(4) 関わりの多いお友達

Y保育士のコメントのうち、「関わりの多い友だち」を整理したのが Table.4 である。

入園当初から3月まで、T・A児とI・M児と関わって遊んでいることが分かった。4月にはA・R児との関わりがあったがその後卒園する3月まで関わることはなかった。また、8月には、H・M児と関わっていたが他の月にはなかった。

したがって、A・K児は1年間T・A児とI・M

児を好きになり関わっていたことが分かった。このように、A・K児の友達との関わりを見てくると、高機能自閉症児は人間には興味や関心をもつことはないとされているが、A・K児に関してはそのようなことはなく大変よく関わっていたことが証明された。しかし、卒園する3月には一人遊びが多いのではないかとY保育士は自閉症特有の症状を気にしていることも見取れている。

Table 4. 関わりが多いお友達

4月	5月	6月	7月	8月	9月
T・A児	T・A児	T・A児	T・A児	T・A児	T・A児
I・M児	I・M児	I・M児	I・M児	I・M児	I・M児
A・R児			H・M児	H・M児	
10月	11月	12月	1月	2月	3月
T・A児	T・A児	T・A児	T・A児	T・A児	T・A児
I・M児	I・M児	I・M児	I・M児	I・M児	I・M児

(5) 遊びの中での役割

Y保育士のコメントのうち、「遊びの中での役割」を整理したのが Table.5 である。

4月は友達と関わって遊ぶことは少なかったが5月以降は好きな友達の中で一緒に遊んだり、7月には友達の中で「お兄さん役で家族ごっこ」をして遊んだりし、人間関係が友達の中で広がっていることが分かる。また10月には友達と集団遊びはするが、自分の遊びの中に入りしっかりと遊び込み、友達とは遊ばずにいた月もあった。このことは11月にもこの状態が続き、12月には仲間の中で遊んだり、また一人で遊んだりを行き来きしながら1月には友達の中に入って遊び出した。2月には友達の真似を

し、自分の生活の力に加えつつ3月には友達の近くで遊ぶことができるようになってきた。

以上からA・K児は自分の世界を持ちつつ、友達と関わり合いながら遊び、友達の遊びを真似して身に付けて、更に自分を成長発達させていることが伺えた。

Table 5. 遊びの中での役割

4月	5月	6月	7月	8月	9月
友だちと同じ空間にいるが関わりは少ない。	好きな友だちの中で遊ぶ。	好きな友だちの中で遊ぶ。	お兄ちゃん役で家族ごっこをする。	友だちと傍で同じ遊びをする。	好きな友だちと遊ぶ。
10月	11月	12月	1月	2月	3月
集団遊びをするが、自分の世界が入ってしまい、友だちとは遊ばない。	自分の世界で遊ぶ。	仲間の中に入って遊んだり、一人で遊んだりする。	友だちの中に入って行く。	友だちの真似をする。	友だちの近くで遊ぶ。

## (6) 来月に向けての保育士の願い

ここでは、「来月に向けての保育士の願い」を整理したのが Table.6 である。

①「友達との関わるについて」、②「どのようなことができるのか確認事項について」、③「次の月に向かってやって欲しいことを前の月に上げていた事項について」の3項目について述べられていた。

①「友達との関わるについて」4月には友達との関わりが少ないので5月には友達と遊ぶように願っていた。また6月には相手の気持ちを知っていくことを願い、7月には色々な友達と関わりを持って行くように関わりを変えていっている。そして8月にはA児のことを周りの友達との違いを見極め、9月には体を動かして、ルールのある遊びを楽しむとあり、10月には友達とルールの共有をして遊べるようにすると少しずつ友達との関わりの仕方のレベルを上げて行っていることが分かった。そして12月には友達の気持ちを知り、1月には友達と一緒に遊ぶことを楽しみ、2月にはY保育士は友達と好きなことをして楽しく遊ぶというように願いA・K児のやりたい遊びをさせ、それを媒介に友達の中に意図的に入れて関わらせていこうという願いが読み取れた。

②「どのようなことができるのか確認事項について」、4月にはどのようなことができるのか確認をしていた。しかしそれ以降にはどのようなことができるのかという確認することはなかった。

③「次の月に向かってやって欲しいことを前の月に上げていた事項について」5月には6月の活動を見据えて夏の遊びの準備をして楽しみながら友達と遊ぶことも願っていた。そして、Y保育士に褒められた時に楽しさを感じられるようにとも願っていた。また、6・7月に夏の遊びを楽しむとあった。8月には自信を持って運動会という園の大行事に参加して楽しむようにし、11月には言葉で接続詞の使い方を教えたり、ボディイメージで指先を伸ばすことや、歩き方でドタドタ歩きに成らないように支援

していた。そのことを12月ではコマの紐を回したり、コマの紐を縛ったり、折り紙などを折ることを意図的にし、指先を使うことを使うことで器用になるように支援していた。1月にはどたばた歩いてしまうのでジャンプの運動遊びをしながら身体を動かして、ジャンプができるような成効体験を意図的にしていた。2月には卒園式に向けて皆と同じような保育内容ができるように支援していた。そして3月にはこれで保育園での生活は終わりということで、小学校での生活の仕方を知り、慣れて行って欲しいと願っていた。

このように1年間のY保育士の願いを見て来ると、友達との関わりを持って欲しいことと、次の月にやって欲しいという願いを先まわりして掲げてA・K児に支援することで、A・K児が保育園で生活し易いようにし、その結果成長発達させていることが伺えた。

## 5. 全体の考察

本研究で対象となったY保育士は、A・K児の加配保育士である。そして、A・K児のクラスの子も達とは顔なじみである。A・K児の3歳児の時には担任をしており、クラスの子も達はクラス全体の半数は知っていた。またY保育士は保育所での保育内容も理解し、活動も自分なりに相違・工夫しながら保育を行なっていることが研究記録や、聞き取りから伺うことができた。

Y保育士は、A・K児の加配保育士をしているが、ただ自分の考えだけで保育を進めていくことはしていない。加配保育士と言ってもA・K児の既存のクラスがあり統合保育を行っているのである。活動を決めて行くのにも1週間に一度は週案の作成があり、活動などは既存のクラスの子も達と同じことをしなければならない。つまり、Y保育士は、A・K児が所属しているクラスや保育所の保育の流れも考えながら保育を行なっていることが推察できた。そのことは、Y保育士が、4月～12月までのA・K児の「これまでの様子」から読み取ることができた。つまりY保育士は、A・K児の様子から保育を

行なっていくことに力をいれつつ、保育所での行事や活動をも考慮しながら支援をしていることが伺えた。A・K児が友達と関わりながらごっこ遊びをさせるため環境設定を積極的にして遊ばせていた。また、玩具で遊びながら自分のことを知ったり、友達のことを知ったりできるように意図的に支援していることが「気になること」や「来月に向けての保育士の願い」から見取ることができた。また、行事の活動の中にもA・K児が育って欲しいことが盛り込まれるようになっていた。更に、2月には、小学校へ入学するので卒園式に皆と同じことができるように早めに練習に入りA・K児が困らないように支援していた。そして3月の卒園式では皆と同じように活動ができていたことが確認できた。また小学校の普通学級に入学させたいと言う保護者の考えも配慮しながら支援を行っていた。それは一斉に話をしたり、一人に声掛けをしたりしながらA・K児の様子を見ながら常に保育をしていた。泥遊び、プール遊び、運動会、集団遊び、クリスマス会、ごっこ遊び、劇遊び、お正月遊び、お年寄りとの交流会を計画し、A・K児に保育を提供していた。このような保育内容を既存のクラス担任保育士と相談しながら保育を進めていくことで、Y保育士にとって保育の寄り所となり、A・K児の保育と既存のクラスを運営していくときにやり易い面もあったと思われる。このことは研究会の時にY保育士から、「既存のクラス担任の先生は全体を見ながら障害児のA・K児の様子も視野に入れ、包括する保育を志していて一緒に保育をしていると楽しくやり易い」と聞くことができた。このように、A・K児はY保育士の行なう保育活動を受け入れながら、自ら成長発達していることが伺えた。Y保育士は保育士5年目と言うこともあり自分も保育を考案しながら、既存クラスの保育士も考案し、両者で協力しながら保育を進めて行ったことが伺えた。その結果、A・K児は成長発達したことが月々の記録や聞き取りの中から汲み取ることができた。また、Y保育士は、A・K児に対して、自閉症児の特徴と5歳児の発達段階をも考慮しながら保育を行っていたことが伺えた。それは「(1)これまでの様子」のA・K児の行動から読み取ることができる。Y保育士は、A・K児がつまずいている内容を細かく丁寧に記述している。そして友達と遊ばせ関わらせたいという願いが4月から3月までもって保育に当たっていた。またA・K児が自由保育で遊ぶときには、パートの先生や、おじいちゃん保育士を付けたりとできるだけA・K児を一人にさせないように人的にも支援していた。更に物的環境にもA・K児の好きな絵本やレゴブロック、ドミノなどの教材を設定している。「よくする遊び」の項

目では、人と関わらせようとしてごっこ遊びの「家族ごっこ」、「お寿司屋さんごっこ」、「世界探検ごっこ」、「逃走中(おにごっこ)」を設定していた。また、12月にはA・K児が器用ではないことを見取り、指先を使うことをしようとコマの紐を回させたり、コマの紐を縛ったり、折り紙を折らせたりしていた。これはY保育士が保育所の12月の行事活動に合わせながら既存のクラスの子どもの活動と同じことをさせA児を支援していることが伺えた。Y保育士は、A・K児が友達とルールの共有できないことに焦りを感じ提供してみたところ、意図的に支援していくと次の月にはできたことにほっとしたことを述べていた。このようにA・K児の様子を見ながら既存のクラスの子どもの様子をも見ながらゆとりを持って統合保育を行っていることが確認できた。また、Y保育士は、健常児と障害児との違いにより、それぞれの表現の仕方が異なるなることにも気づいている。そのことを「保育士の願い」の項目の8月に「周りの友達との違いを見極める」と記載している。高機能自閉症ということをや保育士は自覚しながら支援をしていることを伺い知ることができた。しかし、3月になると、A・K児のための「これまでの様子」や「気になること」など6項目に掲げて来たが、「気になること」の項目において「友達の近くにいるが、一人遊びが多いように思う。人によって態度や振る舞いが違うことが気になる」と記載されている。Y保育士はA・K児を1年間担任してきて、A・K児が高機能自閉症なので人との関わりが困難であることや、コミュニケーションが不得意であることは理解していたので心して支援してきた。しかし以前は友達と遊んでいたのに3月に成って一人で遊んでしまう場面を発見すると、発達が後退してしまったのかと思ってしまったことに気づいていたと思われる。

このように、Y保育士は、保育の中心としては、加配保育士と既存クラスの保育士が考案した保育内容を実践した。その保育方法はA・K児の特徴や様子を的確に見取りつつ、保育所の行事や活動を媒介に、健常児と障害児と一緒にいる統合保育を行い、両者が共に同じ場所にいて育つように両者が育つ包括的保育を行った。特に高機能自閉症の定義の3つ、「3歳位までに現れ、①他との社会的環境の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわること」<sup>6)</sup>であると記載されている。このことはY保育士が十分に理解しており、この3つのことを考慮しながら保育支援をしていたことが伺えた。そしてA・K児を3歳の時にも担任していたことも手伝い、高機能自閉症の症状も十分に理解しており、A・K児の自閉症の症状も考慮し

ながら、正確に見取りA・K児に無理のない支援をし、その結果、ごっこ遊びをして楽しめたり、小学校に入学するという希望を持って2月3月と過ごし、4月に小学校に入学していった経緯がある。

Y保育士がA・K児に抱いていたことは、A・K児のことを障害児と自覚しつつも、「一人の人間として尊重しながら肯定的に言葉掛けをして丁寧に関わってきた」という思いや願いや方法がA・K児に伝わり、その結果Y保育士と子どもたちの信頼関係が構築でき、既存クラスの友達と集団遊びができた。自分の困ったことをY保育士に言葉で自分の思いを伝えることができたと思われる。しかし、Y保育士はA・K児が高機能自閉症であり、そのすべての特徴を消滅させ健常児と同じような情緒をもつことはできなと感じていたことも理解できた。

## 6. 今後の課題

今回は5年目の保育士の保育実践をどのようにしていきたいのかを考えてきた。今後は更にこの研究を進めて行き、6年目の保育士の保育実践を明らかにしたい。

## 引用文献

- 1) 全国社会福祉協議会「保育所保育指針をよむ [解説・資料・実践]」2008年
- 2) 寺島明子・大野和男「3年目の保育士によるクラス担任としての子どもの見方」松本短期大学研究紀要 2010年 p 81
- 3) 全国社会福祉協議会「保育所保育指針をよむ [解説・資料・実践]」2008年
- 4) 同上
- 5) 上野恭裕「おもしろく簡潔に学ぶ保育原理」2009年保育出版 p 188
- 6) 七木田敦「実践事例に基づく障害児保育ちよつと気になる子へのかかわり」保育出版 2007年

## 参考文献

- 1) 小田礼子「保育士者の資質向上に関する園内研修の研究—実践者の気づき—」日本保育学会発表要旨 2010年 p 147
- 2) 佐々木彩水「A児と担任保育者のかかわりの様相に関する一考察」日本保育学会発表要旨 2010年 p 146
- 3) 同上
- 4) 全国社会福祉協議会「保育所保育指針をよむ [解説・資料・実践]」2008年
- 5) 寺島明子・大野和男「自閉症を担当する2年目の保育士における子どもへの関わりと支援1」松本短期大学研究紀要 2009年 p 83 - 93

- 6) 石塚尚美「保育士の子育て支援意識に関する研究—ある法人内保育園における保育士の意識調査より—」日本保育学会発表論文 2008年 p 596